

チベットに於ける『二諦分別論』に対する 三編の注釈書

赤羽 律

0 はじめに

8世紀初頭にインドで活躍した仏教僧ジュニャーナガルバ (Jñānagarbha, ca. 8c) は、『二諦分別論』 (*Satyadvayavibhāṅgavṛtti*, SDVV) に於いてインド仏教中観派に於ける二諦説の一つの完成形を示している⁽¹⁾。その後、チベットに於いて SDVV に対する注釈書が複数書かれたことはこれまでも知られていたが、つい最近までそれらの注釈書を実際に眼にすることはできなかった。しかし 2006 年に『カダム全集 I』が出版され、その中に SDVV に対する注釈書が 2 編所収されていたことから、これまで不明であったチベットに於ける SDVV の受容形態を明らかにできる機会が与えられた。本論文ではその二つの注釈書を探り上げ、その概要と幾つかの問題点を明らかにしたい。また筆者は『カダム全集 I』、『カダム全集 II』に収録されていない SDVV に対する別の注釈書を参照する機会に既に恵まれており⁽²⁾、その注釈書に関してもこの二つの注釈書との関係から若干の言及を行いたい。

1 『Phya pa 注』

チャパ (Phya pa Chos kyi seng ge, 1109–1169) は、 Sampu ne'u thog (gSang phu ne'u thog) 寺の著名な僧である。彼が SDVV に対して注釈書を書いたことは『A khu 稀書目録』にも記載されており⁽³⁾、その存在は以前から知られてきた。『カダム全集 I』に所収されている『Phya pa 注』はこれに相当すると思われる。この『Phya pa 注』はウメ体で書かれ、全部で 33 フォリオからなる。その価値は、何よりもチベット仏教の発展に多大な影響を与えたチャパによって書かれたということに尽きるであろう。

2 『著者不明注』

『カダム全集 I』には、『Phya pa 注』の他にもう一編 SDVV の注釈書が所収されている。この注釈書はウメ体で書かれ、45 フォリオからなる⁽⁴⁾。しかし大きな問題が三点存在する。最初の問題は、全部で 10 フォリオの欠落が確認できる点である。つまり、現段階で実際に読むことが出来るのは 45 フォリオ中 35 フォリオのみであり、全体の二割以上が不明ということになる。具体的な欠落箇所に関しては下表の通りである⁽⁵⁾。

—チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書—

●『著者不明注』中の欠落フォリオ

フォリオ番号	該当する SDVV の k° 番号
ff.1-3	イントロ部分
ff. 13-16	k°5-k°6 とその注釈部分
ff. 26-28	k°14 の注釈部分

二つ目の問題は、一部のフォリオに於いて各フォリオの右端の一部が判読できない状態になっている点である。この判読不可能な部分は行端の一、二文字だけの場合が多いが、かなり広範囲にわたっている箇所も一部ある。そしてこれら二点の問題により、この注釈書の概要の正確な理解が難しくなっている。

最後の問題は、本論文で『著者不明注』と表記している様に、奥書に著者名、論書名が欠落しているという点である。以下、特にこの点について考察したい。

2.1 『著者不明注』の著者について

『カダム全集目録』ではその著者を不明としている(『カダム全集目録』, 86)。また、『カダム全集 I』, 『カダム全集目録』全体を調査した上で詳細な目録を作成した加納氏も、加納(2007, 42, 注71)に於いて、やはり奥書に名前が見いだせないことを指摘し、著者を不明としている。しかし筆者は、この注釈書はチャパの師の一人である Byang chub grags によって書かれたものであると考えている。その最大の根拠は、SDVV の最後に挙げられている一偈と、『著者不明注』の同じく最後に挙げられている奥書の一偈の類似性にある。以下にその両偈を引用する。

SDVV (p.190)	『著者不明注』(45b4)
bden pa gnyis ni mnam phye bas // dge ba bdag nyid thob pa gang // des ni 'gro ba ma lus pa // ye shes snying por bskyed par shog //	phyogs 'dir rab ?? rDo rje seng ges bskul // nus pa med kyang 'bad pas gzhung 'di' sbyar // de' ni 'gro rnam las 'dir myur zhags te // bla med byang chub grags pa skyed par shog //

まず SDVV の d 句を確認すると、そこには「ye shes snying po に生ぜしめよ」と書かれているが、この「ye shes snying po」とは SDVV の著者であるジュニャーナガルバのチベット訳語名に他ならない。即ち、この d 句には恐らくは意図的に著者名が織り込まれていることが分かる。一方で『著者不明注』の d 句を確認してみると、「bla med byang chub grags pa に生ぜしめよ」となっており、その構成自体は SDVV の当該の d 句とほぼ同じである。違うのは ye shes snying po が、bla med byang chub grags pa となっている点である。既に確認したように ye shes snying po が SDVV の著者名であるならば、この bla med byang chub grags pa も同様に著者名であると想定することは十分に可能であろう⁽⁶⁾。実際、Byang chub grags という人物は実在し⁽⁷⁾、チャパの師の一人として知られている。例えば、『プトン聴聞録』には、中観と論理の聴聞の系譜に次の様な順番で名前が記載されている。

『プトン聴聞録』

...gZhan la phan pa bzang po / rNgog lo tsā pa / Khyung rin chen grags / rGya dmar Byang chub grags / Phya pa / gTsang nag pa / Dar ma bkra shis / gNyal pa /... // (『Bu ston 聴聞録』, 19b5-6)

—チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書—

さらに、Byang chub grags が SDVV の注釈書を書いたという事実は『A khu 稀書目録』にも確認できる⁽⁸⁾。加えて、先に挙げた奥書の最後の一偈の a 句には『著者不明注』が rDo rje seng ge の懇願によって著作された旨が述べられているが、11-12 世紀に活躍した Byang chub grags とほぼ同時代に rDo rje seng ge と呼ばれるカダム派の人物が実在している⁽⁹⁾。勿論、著者の確定は最終的には三編の注釈書の内容を比較考察した上で決定されるべきものではあるが、以上の複数の根拠を踏まえ、現段階では『カダム全集 I』に所収されている『著者不明注』（以後、『Byang chub grags 注』と表記）は、Byang chub grags による注釈書であると想定して問題ないであろう。

2.2 『Byang chub grags 注』のタイトルについて

この『Byang chub grags 注』のタイトルについては *bDen gnyis rnam bshad tikka dang bcas pa* とされている（『カダム全集目録』, 86）。この論書名は、恐らく以下に挙げる『Byang chub grags 注』の奥書の最後から二つ目の偈の a 句に基づいている。

bden gnyis rnam bshad ti ka dag dang bcas //

dam pa'i legs gsungs rang gi rtogs pa nmams //

don rnam pas phyir gsal bar rjod pa'i phyir //

gzhung mngas gyur kyang don gnyir nmams la phan //（『Byang chub grags 注』, 45b4）

しかし加納氏が指摘しているように、当該の箇所は偈である以上シラブルの制限を受けるため、この a 句が本来の論書名であると考えすることは困難である。また論書の名前としても幾分不自然である。そこで加納氏は『カダム全集目録』に挙げられた論書名を一部修正し、*bDen gnyis rnam bshad tikka* を仮の論書名として挙げている（加納 2007, 21）。この加納氏の修正は合理的である。しかし私はこの加納氏の提案にもう一つ修正を加え、*tikka* を除いた *bDen gnyis rnam bshad* をより妥当な仮の論書名として提示したい。その様に考える理由は『Byang chub grags 注』の内容にある。実は、この注釈書には *tika* (*tikka*) と呼ばれる注釈書が数多く挙げられている。私が確認した限りでは、*tika* という名前は 45 回用いられている。具体的には下記の通りである。

tika の名前が見いだされる箇所 計 45 カ所

4a3, 4a5, 4b2, 4b6, 5a5, 5a6, 5a8, 6b5, 7a1, 10a1, 11a1, 11a3, 11a4, 11b1, 11b2, 12a5, 12b1, 12b6, 17a1, 18b5, 20b6, 21a6, 21b8, 22a8, 22b1, 24b5, 25a1, 25b6, 31a6, 33b1, 34a2, 34a4, 35a5, 35a6, 35b7, 35b8, 36a4, 37a5, 37b4, 38b6, 39a6, 39b4, 40b1, 45a7, 45b3.

尤もこの 45 という数字は単純に *tika* という名前が挙げられている箇所であり、具体的に *tika* の内容まで引用されている箇所は限られている⁽¹⁰⁾。しかし既に述べたように、現存する『Byang chub grags 注』が 10 フォリオを欠いているという事実を考慮に入れるならば、完全な『Byang chub grags 注』にはさらに多くの *tika* という名前が挙げられていたと考えられる。

この様に *tika* という別の注釈書に関する言及を数多く含んでいるという事実を踏まえた上で、仮の論書名の根拠となった先ほどの *a* 句を見直してみると、*a* 句は「*tika* を有する *bDen gnyis rnam bshad*」と解釈するのが妥当ではないだろうか。その仮説に従うならば、加納氏が指摘した仮の論書名から *tikka* という表現を除いた方がより妥当であろう⁽¹¹⁾。

2.3 *tika* とは何か

この『著者不明注』が *Byang chub grags* によって書かれた注釈書であり、かつ「*tika* を有する *bDen gnyis rnam bshad*」と呼ばれうるものであったとして、その *tika* とは一体何を指すのであろうか？ 一般的に注釈書を指す *tika* という言葉によって言及されていることから、*tika* とは『*Byang chub grags* 注』以前に存在した *SDVV* の別の注釈書のことを意味していると考えられる。ただし *Byang chub grags* という人物は後伝播期のかなり初期の人物であり、彼以前に *SDVV* に対して注釈書を書いた人物を想定しようとするとかかなり限られてくる。実際に筆者が確認している限りでは、『*A khu* 稀書目録』中に見いだせる *SDVV* に対する注釈書の中で一番古いものは『*Byang chub grags* 注』である。しかも *Byang chub grags* がこの *tika* をほぼ肯定的な意味でしか引用していないという状況を考えるならば、この *tika* と呼ばれる注釈書は単なる一注釈書ではなく、その当時、既に権威のある注釈書として認められていた可能性が高い⁽¹²⁾。その様な状況を踏まえるならば、『*Byang chub grags* 注』に言及される *tika* と呼ばれる注釈書は、シャーンタラクシタ (*Śāntarakṣita*) によって著作された *SDVV* に対する注釈書『二諦分別論細疏』(*Satyadvayavibhāṅgapañjikā: SDVP*) のことであると考えべきではないだろうか。実際、そのように考えられる幾つかの根拠が存在する。まず指摘したいのは、『*Byang chub grags* 注』に見いだされる次の二例である。

(1) *gal te bCom ldan 'das dang slob dpon Klu sgrub dag gis rmongs pa ma bzlog pa / slob dpon Yes shes snying pos zlog par byed na slob dpon 'di' la shes pa lhag pa yod dam zhe na / med mod kyi / bCom ldan 'das kyis dngos po gnas lugs tsam gsungs pa / slob dpon Klu sgrub gis rigs pas 'thad par bstan pa nyid sgros btod cing gsal ttab pa'i tshul gyis go sla bar man ngag tu bsdebs pa ste / 'grel pa dang ti ka dang yig chung las mi mkhas pa bye brag tu rtogs par 'gyur ba myong pas grub pa yin no //*

(『*Byang chub grags* 注』, 4a4–5)

もし世尊と規範師ナーガールジュナが遮蔽していない迷妄を、規範師ジュニャーナガルバが遮蔽するならば、この規範師（ジュニャーナガルバ）には（世尊やナーガールジュナにはない）余他の智が存在するのかどうか、というなら、（その様な余他の智は）存在しないが、世尊は事物の本性のみをお説きになり、規範師ナーガールジュナは、論理によって正しく説示する方法を生み出し、（ジュニャーナガルバは）明瞭に説明することで、簡単に理解されるように教説に纏めたのだ。*'grel pa* と *tika* と細字 (*yig chung*)⁽¹³⁾ からでは分からないことを、個別に理解することは、直接経験によって成立するものである。

(2) *mdo' de dang der zhes bya ba 'grel pa ma yin nam / 'di' tshig gi lhag ma yin na / 'grel pa dang ti ka la sogs pa thams cad tshig gi lhag ma zhes ci ste mi brjod ce na / mi brjod de / 'di' dag gis ni rtsa*

—チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書—

bas brjod pa'i don nyid gsal bar byed pa'i phyir ro // (『Byang chub grags 注』, 6b5)

『其処此処の經典に』(SDVV, k³ab 注)ということは、注釈ではないのかどうか？(SDVV に述べられている様に)これが言葉の余意であるなら⁽¹⁴⁾, 'grel pa と tika など全てが言葉の余意であるとどうして述べられていないのか、というなら、述べられない。何故なら、それら ('grel pa や tika) は、偈によって述べられた意味自体を明確にするものだからである。

この二カ所で、tika は 'grel pa と並んで挙げられている。'grel pa は、その名前、及び文脈から判断すると、ジュニャーナガルバによる自注 SDVV を指していると考えられる。それ故に、'grel pa (即ち SDVV) と並んで挙げられる価値を有する注釈書 tika は、時にジュニャーナガルバの弟子とも言われるシャーンタラクシタの注釈書 SDVP 以外に存在しないのではないだろうか。実際、『Byang chub grags 注』に引用された tika の引用内容の一部は SDVP 中に見いだされるのである。

SDVP	『Byang chub grags 注』
● D17a5-6; P.4b1-2: 'jig rten smos pa ni bden pa gnyis rnam par dbye ba la mkhas pa'i che ba nyid brjod pa'i phyir te / bden pa gnyis rnam par dbye ba la mkhas pa 'di lta bu ni / gang gis 'jig rten 'khor ba'i srin bu yang /	● 4b5: 'jig rten zhes bya ba ni 'khor ba'i srin pu yang zhes tikas bshad pa ni
● D17b1; P.4b5: 'gro ba la phan pa 'byung ba bskyed pa'i blo dang ldan pa dag las gzhan yin pa'i phyir ro //	● 4b2: 'gro ba la phan pa 'byung pa'i blo dang ldan pa las gzhan zhes tikas bshad pa'i phyir
● D17b3-4; P.4b8-a1: ji ltar snang ba 'di kho na zhes bya ba bsnan pa ni rigs pa ji lta ba bzhin du ma yin no zhes bstan pa'i phyir ro //	● 10a1: des na kho na zhes brnan pa'i rigs pa ji lta ba bzhin du ni ma yin no zhes tikas bshad pa ltar ro //

一見して分かる様に、ここに挙げた例は『Byang chub grags 注』中に tika の内容として引用された一文と、SDVP の当該箇所の注釈文がほぼ一致する例である。またここに挙げた以外にも SDVP と内容上一致するものが数多く存在する。それ故に『Byang chub grags 注』で tika として引用される注釈書は SDVP の可能性が高い。

ただし、tika として挙げられている内容の全てが SDVP の内容に一致する訳ではないということも指摘しておく必要がある。また、SDVP も含め SDVV に関する注釈書を全て tika として挙げている可能性や、tika が SDVP の内容に忠実に従った別の注釈書である可能性も否定できない。そうした点には留意する必要があるものの、少なくとも tika の一部が SDVP の内容を指していることは間違いなさであろう⁽¹⁵⁾。

3 『Dar ma bkra shis 注』

最後に、筆者が『カダム全集 I』、『カダム全集 II』以外で参照した SDVV に対する注釈書について言及しておきたい。この注釈書の概要については、Akahane (2005) にて既に指摘しているため詳細は割愛するが、そこに於いて、この著者 Dar ma bkra shis に関して二つの可能性を指摘した。一つは 12 世紀前半に sPyan yas (sPyan g-yas) 寺の第三代の座主として活躍した人

—チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書—

物の可能性であり、もう一つは、先に挙げた『プトン聴聞録』の記述に基づき、チャパの少し後に活躍した12世紀後半の人物の可能性である。同論文では最終的な判断を留保しつつ一応後者の可能性が高いことを指摘したが、今回『Phya pa 注』を参照することが可能になったことによって、Dar ma bkra shis が後者の人物であることが明らかになったと思われる。その理由は次の通りである。

『Phya pa 注』(1b7)

(2) mchod par brjod pas phyi nang gi bar chad zhi ste / rtsom pa mthar phyin pa ni bzhed pa dmyigs pa skabs su bab pa'i 'bras bu'o //

「帰依を述べることによって内外の障害を静め、論書が完成すること」については、願望を心に抱くことが当面の果報である。

まず引用したのは、『Phya pa 注』の冒頭に於いて、自利には三つの果報があると述べている部分の「二つ目の果報」について言及している箇所である。このチャパの説明はかなり簡潔で具体的な内容が不明である。一方『Dar ma bkra shis 注』でも、その冒頭で自利には三つの特徴があると注釈しているが、先ほどの『Phya pa 注』と同じ二つ目の特徴についての説明は次の通りである。

『Dar ma bkra shis 注』(1b4-6)

(2) gnyis pa (dod pas dmyigs pa) ni mchod par brjod pa las bstan chos rtsom pa mthar phyin par 'gyur ba yin te / bstan chos brtsams pa mthar myi phyin pa'i rgyu ni phyi nang gi bar chad yin la / de yang bsod nams ma yin pa las 'byung ba yin pa la 'dir mchod par brjod pas bsod nams 'byung ba las bsod nams ma yin pa 'gags pa na phyi nang gi bar chad zhi ba'i phyir bstan chos brtsams pa mthar phyin par 'gyur ro // 'dir yang don du gnyer bar bya ba yin pas skabs su bab pa'i don yin no //

二つ目（「望むことで心に抱くこと」）については、帰敬を述べることに基づいて、論書を著作することは完成するのである。（一方で、もし）論書が著作されることが完成していない（なら、その）原因は、内と外との障害であり、それ（内と外との障害）も不善から生じたものである。（この）場合、彼の者に対して帰敬を述べることによって福德が生じることから、不善が取り除かれるなら、（その場合には、）内と外との障害が静まるから、論書が著作されることが完成することになるであろう。これについても希求されるべきものであるから当面の利益である。

先ほどの『Phya pa 注』の内容と比較するとき、Dar ma bkra shis のこの説明は、『Phya pa 注』の内容に沿って詳しく説明したものであることが分かる。紙幅の関係から詳細な比較考察は省略せざるを得ないが、自利についての残り二つの特徴に関しても『Phya pa 注』は簡潔であり、『Dar ma bkra shis 注』がその内容を詳しく説明しているという同じ注釈形態をとっていることは明らかである⁽¹⁶⁾。この様に Dar ma bkra shis が『Phya pa 注』を知っていた可能性が高いことから、Dar ma bkra shis はチャパより少し遅れて12世紀後半に活躍した人物であると考えられる。

4 まとめ

さて、以上で SDVV に対する三つの注釈書の概要を簡単ながら確認した。その結果、この三つの注釈が、ほぼ一世紀のうちに、『Byang chub grags 注』→『Phya pa 注』→『Dar ma bkra shis 注』の順番で著作されたことが判明した。それ故に、この三つの注釈の異同を丁寧に確認していくことで、チベット仏教後伝播期の初期に於いて SDVV がどのように解釈され、纏められていったのかを明らかにすることが出来るであろう。この点については今後の課題となる。本論文ではその詳細な比較にまで立ち入ることは出来ないが、現段階で把握しているこの三つの注釈書の比較を通じて見いだされる特徴を一点だけ指摘して論文の纏めとしたい。

この著作順に従って三つの論書のヴォリュームを眺めると、時代を経るにつれ、注釈の全体量が減ってきているという特徴が見出せる。極端な話、三編のうち最も早い『Byang chub grags 注』と最も遅い『Dar ma bkra shis 注』では、その量が約六割弱になっている。インドに於ける注釈の伝統から言えば、一般的に時代が下るにつれ注釈量は増える傾向にあるが、この三編の注釈を比べる限り、その傾向とは明らかに異なる。三編の注釈書に眼を通した筆者の印象にすぎないが、この三編の中で最初に書かれた『Byang chub grags 注』が最も冗長な注釈であり、三編の中で最後に書かれた『Dar ma bkra shis 注』が最も要点が整理されている印象を受ける。加えて、『Dar ma bkra shis 注』は他の二つの注釈書に比べて比較にならないほど、異説、経典、論書の引用が多い。恐らく SDVV のチベットに於ける注釈は時代が経つにつれ次第に内容が整理され、その結果ヴォリュームが減っていったものと思われる⁽¹⁷⁾。

この他の興味深い事実に関しては紙幅の関係もあり省略せざるを得ないが、今後別な機会に改めて考察を行いたい。

略語表

『A khu 稀書目録』	A khu Ching Shes rab rgya mtsho (1803–75). <i>Dpe rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig don gnyer yid kyi dunda bzhad pa'i zla 'od 'bu gyi snye ma. Materials for a History of Tibetan Literature</i> . Vol. 2, no. 73. New Delhi, 1963.
『Dar ma bkra shis 注』	Dar ma bkra shis (ca.12c). <i>bDen pa gnyis rnam par 'byed kyi bshad pa</i> . Mss., 26fols.
『Phya pa 注』	Phya pa Chos kyi seng ge (1109–69). <i>dBu ma bden pa gnyis rnam par bshad pa yi ge rung dus gzhung gsal bar byed pa</i> . see 『カダム全集 I』 Vol. 6, 181–250, 33fols.
SDVP	Śāntarakṣita(ca.724–88). <i>Satyadvayavibhaṅgapañjikā</i> . D.(3883)sa15b2–52b7, P.(5283)sa 1–48b7.
SDVV	Jñānagarbha(ca.8c). <i>Satyadvayavibhaṅgavṛtti</i> . see Eckel (1987, 155–90).
『カダム全集 I』	<i>bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po</i> . Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. Vols. 1–30. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006.
『カダム全集 II』	<i>bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs gnyis pa</i> . Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. Vols. 31–60. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.
『カダム全集目録』	<i>bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po'i dkar chag</i> . Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006.

—チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書—

- 『中観真実詳解』 rGya dmar ba Byang chub grags (ca. 11c–12c). *dBu ma'i de kho na nyid rnam par dpyod pa*. see 『カダム全集 II』 Vol. 31, 7–67, 31fols.
- 『著者不明注』 *bDen gnyis rnam bshad t̄ikka*. see 『カダム全集 I』 Vol. 19, 247–316, 35fols.
- 『プトン聴聞録』 Bu ston Rin chen grub (1290–1364). *Bla ma dam pa rnam kyis rjes su bzung ba'i tshul, bKa' drin rjes su dran par byed pa*. in *The Collected Works of Bu-ston*, Śata-piṭaka Series Vol. 66 (1a), part 26. New Delhi, 1971. Tohoku No. 5199.

文献表

Akahane, R.

- 2005 “Study on the Satyadvayavibhaṅga (2): A Tibetan commentary and its author”. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 53, no. 2, pp. 964–961.

Eckel, M. D.

- 1987 *Jñānagarbha's commentary on the distinction between the two truths: an eighth century handbook of Madhyamaka philosophy*, State University of New York Press (SUNY series in Buddhist studies).

加納 和雄

- 2007 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』——校訂テキストと内容概観」『高野山大学密教文化研究所紀要』20, pp. 162–105.

注

- (1) ジュニャーナガルバ以降も、中観派の諸論師は各々の論書にて二諦説を開陳するが、ジュニャーナガルバが SDVV で提示した二諦説の枠組みを大きく塗り替える画期的な説は存在していないように思われる。
- (2) 筆者がこの注釈書を参照し得たのは、ハーバード大学の L. van der Kuijp 教授と京都大学の御牧克己教授のご好意による。
- (3) 『A khu 稀書目録』: no. 11317, *dBu ma bden gnyis kyi 'grel pa* by Chos kyi seng ge.
- (4) 1 フォリオは 8 行からなるが、33 フォリオのみ、33a が 6 行、33b が 5 行と他のフォリオより行数が少なくなっている。
- (5) この三カ所の欠落のうち、ff.1–3 の欠落部分に関しては加納 (2007, 注 71) に言及されている。
- (6) この様に著者名を読み込んだと思われる奥書の最終偈は、『Phya pa 注』や『Dar ma bkra shis 注』には見いだされない。それ故に、その様な句を挿入することは必ずしも一つの伝統になっていたわけではない。
- (7) 『カダム全集 II』には Byang chub grags の『中観真実詳解』と呼ばれる論書が存在している。また、一般的に知られている彼の名前は次に挙げている『プトン聴聞録』にも見られるように、rGya dmar ba Byang chub grags であり、Bla med Byang chub grags ではない。しかしその『中観真実詳解』の奥書の同じく最終偈の d 句には bla med byang chub grags pa thob par shog // (『中観真実詳解』, 31a2) と書かれており、さらにこの bla med と byang chub grags pa の間に rgya dmar ba と挿入されている。それ故に Bla med Byang chub grags と rGya dmar ba Byang chub grags は同一人物と考えて問題ないであろう。
- (8) 『A khu 稀書目録』 no. 11347: *dBu ma bden gnyis kyi t̄ikka* by rGya mar ba Byang chub grags.
- (9) TBRC によると、rDo rje seng ge はカダム派の人物であり、その生存年は 1054–1123 であるという。
- (10) 此処で挙げた 45 箇所 of tika とは、tika の具体的な引用があるものの他、「同様の内容は tika にも述べられている」という全体的な内容一致を説くもの、更には対論者の発言の中で「tika に説かれていることはそうではない」といったものまで全てを含めた数である。

—チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書—

- (11) 勿論、これも仮のタイトルに他ならず、実際のタイトルは不明とするしかない。
- (12) 確認出来ている限り、45カ所 tika という名前が挙げられる中で一カ所だけ tika の内容が否定されている。当該の箇所は k⁶c の注釈箇所である。(rig pa'i ngo bor ram / rang rig pa'i ngo bor rgyu las skyes zhes brtags nas de la lan btab zin pa ti ka'i de ni mi 'thad de / rig pa'i ngo bo sun phung pas rang rig pa'i ngo bo zhes gzhan du khas blang so // : 17a1).
- (13) 細字が具体的に何であるかは不明。SDVV, SDVP の行間に書き込まれた何らかの注記のことか。
- (14) SDVV ではこれが k³ab の余意であると述べられている。(mdo de dang der zhes bya ba ni tshig gi lhag ma'o //: SDVV, 156).
- (15) 『Dar ma bkra shis 注』にも tika と呼ばれる注釈書が3回引用されるが、いずれも SDVP との相関性は見出されない。また名前は挙げられていないものの、SDVV に対する別の注釈書からの引用が複数存在する。tika と呼ばれるものも含め『Dar ma bkra shis 注』に引用されている他の注釈書は全て間違った解釈の例として挙げられ、否定されているが、現在確認できている限りに於いて、それらの内容は『Phya pa 注』、『Byang chub grags 注』何れとも完全には一致しない。
- (16) 『Phya pa 注』と『Dar ma bkra shis 注』の残りの二つの特徴部分は以下の通りである。
 『Phya pa 注』 dang po la'ang gsum ste / (1) rtsom pa'i thog mar mchod par brjod pas rtsom pa po ya rabs su gzhan gyis rig ste / bstod pa dang grags pa 'byung pa ni 'jig rten pas don du brtsi bas 'jig rten du gtogs pa'i don zhar la byung ba'i 'bras bu'o // (2)..... (3) mchod par brjod pa las bsod nams 'phel bas mngon mtho'i bde ba thob cing mthar nyon mongs pa'i nad zhi ba'i thar pa dang / thams cad mkhyen pa thob pa ni phan pa dang bde ba thob pa ste gtso' bor byas pa'i 'bras bu'o // (1b6-8).
 『Dar ma bkra shis 注』 dang po la yang gsum ste / (1) 'jig rten par rtogs pa'i don dang / (2) 'dod pas dmyigs pa dang / (3) phan bde' sgrub pa'o // (1) dang po ni 'jig rten na gang zag ya rabs nams las dang bya ba la 'jug pa na phyag dang mchod pa sngon du btang nas 'jug pa ltar slob dpon kyis kyang bstang bcos rtsom pa la 'jug pa na phyag dang mchod pa byas pa las gang zag ya rabs dang mthun par go nas bstod pa dang grags pa thob pa'o // de yang slob dpon kyis don du ma gnyer yang 'byung bas zhar la byung ba'i don to // (2) (3) gsum pa ni yang mchod par brjod pa las bsod nams thob pa ni gnas skabs kyi 'bras bu bde' ba dang mthar thug gi 'bras bu phan ba thob par 'gyur pa'o // gang zag dam pa nams kyis tshe 'di'i bde' ba don du gnyer bya ma yin yang tshe phyi ma'i bde' ba don du gnyer bya yin pas gtsor bya pa'i 'bras bu yin no // (1b3-6).
- (17) ただし、このことは全体的に纏められ、単に短くなったということを意味しているわけではない。先行する注釈書の内容が非常に簡素化される箇所もあれば、先行する注釈より詳しい説明が施される箇所もある。今後その差異を明確にすることで、各論師が何を重要だと考えたのか、或は時代の経過の中で何に関心が向けられる様になったのかを明らかにすることが出来ると考えている。